

[成果情報名] 半径 3000mm 樹形仕立て法の効果

[要約] 樹形を半径 3000mm 弧状の仕立てにすることで、茶株面の日平均気温の差が小さく、一番茶の芽揃いが良くなり百芽重が大きく、一番茶収量の増加に結びつく。さらに、芽揃いが良くなることで荒茶品質が向上し、市場評価が高くなる。

[キーワード] 茶園、樹形、枝条構成、芽揃い、乗用型摘採機、微気象

[担当] 香川農試・満濃分場

[連絡先] 電話 0877-79-3690

[区分] 近畿中国四国農業・茶業

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

本県茶園の樹形は、二人用の可搬型摘採機による半径 1150mm の弧状仕立てが中心である。本樹形は、一番茶生育期の凍霜害など低温の影響を受けると、摘採面の傾斜の山側と谷側で生育差が生じ、収量、品質低下が見られる。近年、傾斜地茶園でも乗用型摘採機の導入が進み、水平に近い弧状仕立て（半径 3000mm）茶園が増加してきている。そこで、樹形の違いが新芽生育および収量、品質に与える影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 2月から一番茶摘採時までの摘採面の傾斜の山側、中央、谷側における平均気温の積算値は、半径 1150mm で摘採面の傾斜の山側と中央が谷側より約 20~30℃高く、半径 3000mm では摘採面の傾斜の位置による気温の差は 10℃未満と低い（[図 1](#)）。
2. 萌芽期は、半径 3000mm が半径 1150mm より 1 日程度早い（[表 1](#)）。
3. 平均摘芽長は、半径 3000mm が半径 1150mm より長く、調査位置別には半径 1150mm の谷側が山側～谷側中央より 1cm 程度短く、半径 3000mm ではその差は小さい（[表 1](#)）。
4. 一番茶収量は、半径 3000mm の百芽重がやや重く、摘芽長はやや長くなり増収となる（[表 1](#)、[図 2](#)）。
5. 荒茶品質は、半径 3000mm で新芽の芽揃いが良くなり荒茶の外観品質が優れる。さらに、6号ふるい以下の大型の荒茶が少なく、荒茶入札価格の向上につながる（[表 1](#)、[図 3](#)）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験は、防霜ファン設置、北面傾斜 8 度条件の等高線畦で実施した試験であり、傾斜の方向や傾斜度条件（急傾斜地、平坦地など）が変わった場合は、その効果を検証する必要がある。

[具体的データ]

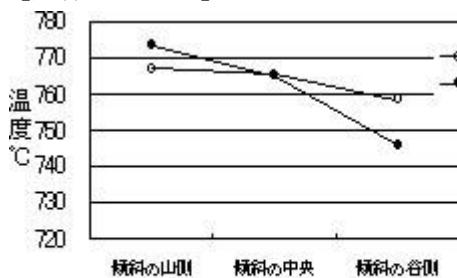


図 1 摘採面の傾斜の位置別積算平均気温 (2006/2/1~5/8 の積算値)

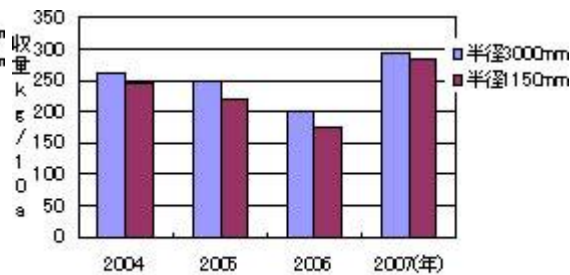


図 2 樹形の違いによる一番茶収量

表1 一番茶摘採位置別粋摘み調査結果

試験区	萌芽期	一番茶粋摘み(20×20cm)							荒茶官能審査結果			市場 評価 円/kg
		粋摘み 重 g	摘芽数 本	百芽重 g	摘芽長 cm	開葉数 枚	出開き 度%	外観	内質	品質 合計		
半径 3000mm	平均値	4月5.5日	16.2	33	50.2	4.0	2.8	34	18.5	28.3	46.8	3000
	山側	4月6日	16.5	29	56.1	4.2	2.9	36				
	山側中央	4月5日	15.2	31	49.8	4.0	2.8	34				
	谷側中央	4月5日	16.4	36	46.3	3.9	2.8	31				
	谷側	4月6日	16.9	36	48.6	4.0	2.8	34				
半径 1150mm	平均値	4月6.5日	15.8	33	49.1	3.7	2.8	36	17.9	27.8	45.6	2725
	山側	4月6日	17.3	32	53.3	3.9	2.8	37				
	山側中央	4月6日	18.7	33	57.8	4.3	2.9	39				
	谷側中央	4月7日	15.2	36	44.5	3.7	2.7	31				
	谷側	4月7日	12.1	30	40.7	3.0	2.6	37				

注1) 萌芽期および一番茶粋摘みデータは、2005～2007年データ平均値、荒茶官能審査データは2004～2007年データ平均値、市場評価は2006～2007年データ平均値である。

注2) 荒茶官能審査は、外観（形状・色沢）、内質（香氣・水色・滋味）の各項目ごとに最も優れたものを10点満点の相対評価とした。

注3) 市場評価は、JA香川県茶流通センターでの入札価格を参考に評価。

注4) 試験区山側～谷側は、粋摘み位置を示す。摘採面の傾斜の山側から谷側へ4ヶ所均等に調査粋を設置。

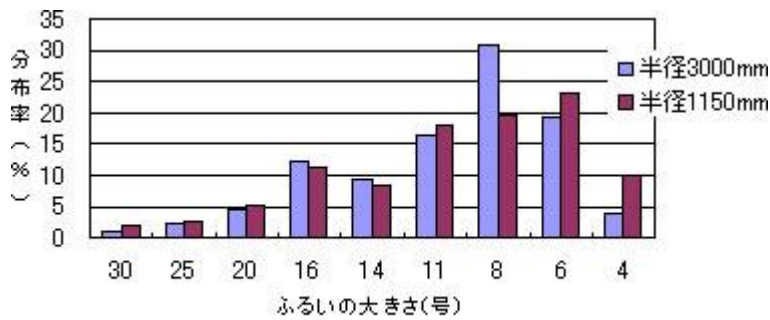


図3 樹形別荒茶粒度分布図(2007年産)

[その他]

研究課題名 : 乗用管理機導入に対応した樹形改善技術の検討

予算区分 : 県単

研究期間 : 2004～2007年度

研究担当者 : 原井則之